

金沢大学総合移転第II期計画地内埋蔵文化財調査報告
・ 1995年3月

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 達夫, 中村, 慎一, 岩田, 安之, 湯尻, 修平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1566

金沢大学総合移転第Ⅱ期計画地内 埋蔵文化財調査報告・1995年3月

佐々木達夫, 中村 慎一, 岩田 安之, 湯尻 修平

1. 調査にいたる経緯

金沢大学総合移転事業第Ⅱ期計画は金沢市若松町、田上~~がみ~~町、角間~~がみ~~町にまたがる約109ヘクタールを対象としている。第一期移転事業で埋蔵文化財の発掘調査を行ったため、金沢大学は第Ⅱ期移転用地内の遺跡の存在に対しても配慮していた。1993年度に金沢大学から石川県企画開発部金沢大学総合移転対策室に埋蔵文化財の取り扱いについて問い合わせた結果、石川県立埋蔵文化財センター企画調整課が遺跡の有無を確認するため現地踏査することになった。石川県土地開発公社の所有する土地であるが、調査に関連する費用は金沢大学が負担した。

1993年夏の段階では樹木の繁茂が著しく、遺跡の確認が困難であった。そこで晩秋から冬にかけて埋蔵文化財分布調査を実施した。調査方法は現地踏査を主とし、谷間では重機を用いた試掘調査を部分的に行った。調査の対象とした地域は将来造成により地形が改変される予定の部分だけに限り、緑地として現状保持される区域は対象外とした。調査の結果、尾根は痩せ、谷は地滑りによる厚い堆積を示しており、集落遺跡が立地できるような場所は限られていることが判明した。現在の大学敷地内から尾根に登り、尾根伝いに金沢市田上新町の東端に下りた部分の山間地、田上新町の東側にあたる台地端部で、段状に整地したと見られる場所が発見された。そこは指のように延びた地形の尾根の先端部にあたり、急傾斜の多い周辺とは異なって平坦面になっていた。

この平坦面は大きく上下2つのグループ(A・B)に分けられる。上にある5段程度の平坦面Aの範囲は東西約80m、南北約70mで、その南側に近接した下の2段の平坦面Bの範囲は東西約60m、南北約40mである。平坦面Bでは、その西端に最近まで使用されていた炭焼き窯跡が残っている。谷筋から登る道はなく急傾斜面であったため、重機による試掘は行えなかった。地表面ではまったく遺物が発見できなかった。そのため遺跡である確認はできなかったが、地形からみれば遺跡が存在するようにみえた。

石川県立埋蔵文化財センターから平坦面が遺跡である可能性があるが確認できないとの報告を受け、金沢大学は総合移転実施特別委員会に「角間地区埋蔵文化財検討小委員会」を設置し対応策を協議した。その結果、遺跡であるか否かを確認するためには試掘調査を実施する必要があると判断し、1994年度に金沢大学内に「角間地区埋蔵文化財試掘調査団」を組織することになった。学内関係者および県立埋蔵文化財センター職員を調査団員、および補助員としたが、その構成は次の通りである。

佐々木達夫, 守屋以智雄, 中村慎一, 藤井純夫(金沢大学文学部) 藤則雄(金沢大学教育学部) 山縣肇, 森利夫(金沢大学事務局企画調査課) 湯尻修平, 小阪大(石川県立埋蔵文化財センター企画調整課) 中本寛, 岩田安之, 波頭桂(金沢大学大学院文学研究科考古学専攻) 向井互, 庄田知充, 小沢佳憲, 酒井中, 吉田和則, 蟹江寿美, 濱名弘二, 井澤麗, 石田浩司, 犬塚あや子, 九千房百合, 原和

也、廣田誠、吉井剛(金沢大学文学部考古学コース)。

調査に至るまでの各関係機関との折衝や会議事務、発掘の準備などの煩雑で気苦労の多い仕事は、金沢大学事務局企画調査課係長、森利夫が中心になって進めた。1994年10月に平坦面の全域にわたって太さ5cm以下の立木や下草などを刈り払って調査に備え、1995年3月には調査機材の調達やテント設営、マイクロバスの運行、食事の手配などの一切を事務局で行った。試掘調査後の報告書作成の作業は文学部考古学研究室で実施した。図面、写真、出土品などは考古学研究室で保管している。

II. 遺跡周辺の地理的環境

ここでは第1期移転時の発掘報告書『角間』に記載された藤則雄の研究を参考に角間地区の地形を概観する。角間地域の地形は(図1)、標高70~160mの比較的なだらかな段丘を伴う、やや開析された丘陵性地形で囲まれた盆状地形を呈する。地形区分では森本丘陵域に属している。丘陵は北東-南西と、北西-南東の2方向に卓越している。段丘は分布高度から標高65-75m、75-90m、95-100m、105-115m、120-130m、および140-150mの6段に区分される。いずれの段丘も河成段丘に属する。

水系は小規模で、角間川が唯一の河川である。河谷は丘陵・段丘地をぬって樹枝状に発達し、谷頭では地質の影響で急崖をなすところが多い。南部域には角間川によって浸食されてできた小平坦地がある。

本地域の起伏量は、東部から北部にかけてと南西部とで大きく、約50mであるが、平均して30-50mの部分が広い。この現象は必然的に本地域の傾斜度とも正の相関関係にあり、丘陵の顕著な北部域では30度以上のやや急な斜面もあるが、中部-南部域の河谷の発達するところでは約20度の緩い斜面も見られる。なお、谷密度は総じて2-3であるが、5以上の地区は中部域に見られ、0の所も局地的ではあるが存在する。

III. 試掘調査の経過

試掘に先立ち、事務局で地元の老人にお聞きしたところ、当該地はイッチョウジ(一丁寺?)と呼ばれ、昔から寺院があったといわれている場所であり、平坦面では畑作をしたことはないとのことであった。学内関係者で古文書を調べたが、関係する資料は発見できなかった。委員会や調査団などで数回の現地検討会や打合せ会などを行い、準備を整えてから試掘調査を開始した。日程は1995年3月15日から29日まで計9日間である。その経過の概要は以下の通りである。

3月15日：調査開始。1m幅のトレンチ1,2,3,4,5,6,7を設定。トレンチ2,6,7で地山を確認。

3月16日：新しくトレンチ8,9を設定。土師器4片出土。

3月17日：平坦面A上段に仮の基準としてレベルポイント1(レベル=0とする)を設定。土師器1片出土。

3月20日：トレンチ1,2図面作成終了。トレンチ1,2,4写真撮影。土師器21片出土。

3月22日：新しくトレンチ10を設定。金沢市域1/2000地図よりレベルポイント1,2,3,4の標高を決定。ポイント1=109.175m, ポイント2=105.273m, ポイント3=95.655m, ポイント4=91.565m。土師器56片、鉄滓出土。トレンチ4図面作成終了。

3月23日：新しくトレンチ12,13を設定。12は2m四方のトレンチである。各トレンチの位置を平板測量で縮尺1/200の地図上に落とす。トレンチ5,6,9図面作成終了。トレンチ1,3,4,5,7,9写真撮影。遺物計52片出土。土師器51片、須恵器1片でトレンチ12出土。

3月24日：トレンチ8,11,12 図面作成終了。土師器16片、大正7年銘貨幣1点出土。

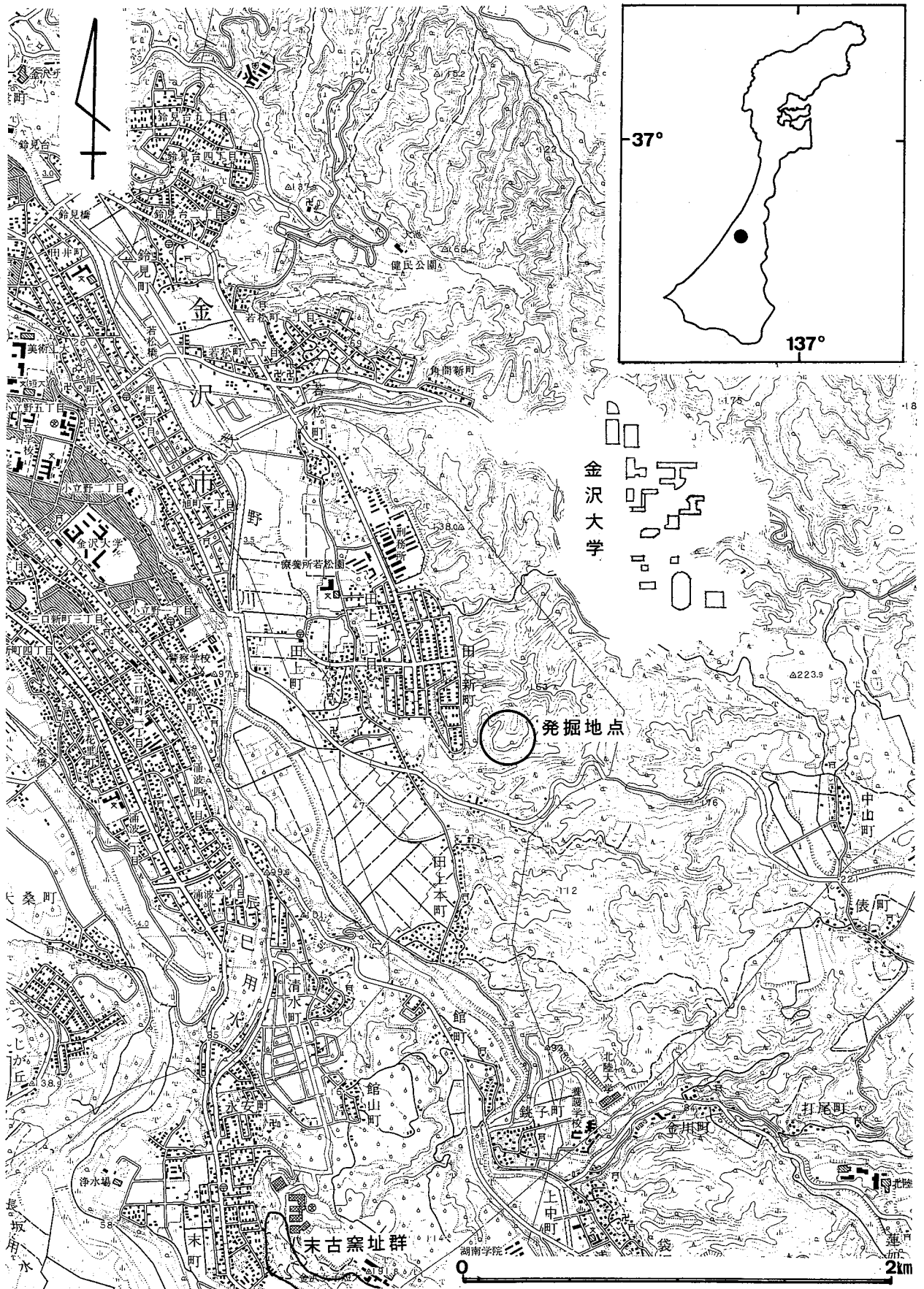


図1 発掘地点と周辺の関連遺跡

3月27日：トレンチ6の西側斜面の等高線上に10穴ほどの狸穴発見。縮尺1/100で平板測量を行う。トレンチ13図面作成終了。各セクション図の土層注記方法を統一する。遺跡全景、トレンチ6,8,11,12,13写真撮影。

3月28日：トレンチの観察および図面作成。

3月29日：トレンチ埋め戻し。

IV. トレンチ調査の方法と成果

トレンチを計13本、平坦面が山際に接する部分で傾斜に直交するように設定した(図2)。幅1m、長さは3mから15mである。平坦面が人工的に造られたとすれば、尾根の先端部を切断して造成するか、盛土して造ったと推定される。平坦面の端を調査することで効率的に造成地であるか否かを判断できるであろう。13本設定したトレンチのうち、トレンチ3は堆積土が厚く予定期間内に掘りあげることが困難であったため途中で放棄した。作業はトレンチ内の遺物の出土状態と堆積土層の観察を主眼において進めた。

その結果、トレンチ1,2を設定した平坦面に斜面の削平による人為的平坦面の造成が確認できた。他の平坦面は地滑り層や自然堆積層であり、造成の痕跡は確認できなかった。

遺物の出土したすべてのトレンチにおける遺物包含層は、基本的に黒褐色土層である。しかし造成の確認されたトレンチ1,2のある平坦面からは遺物の出土がなかった。以下、各トレンチの所見を述べる。

トレンチ1(図3)：地山(黄色粘土)を削平して平坦面を造っており、急斜面部分を階段状に削り出している。平坦面の標高は109.3mで、山際の段の奥行きは約40cm、高さは約30cmである。遺物は発見されない。基本的な層位は、削平した地山の上に滑り落ちてきた第6,5,4層が堆積し、その上に自然層である第3,2層が堆積する。

トレンチ2(図4)：トレンチ1と同様に平坦面を造っており、斜面を3段、階段状に削っている。トレンチ2の平坦面は標高109.3mで、トレンチ1の平坦面とほぼ同じレベルである。トレンチ1と2の平坦面は同時期に造成したものと考えられ、段もトレンチ1のそれと対応する。段の奥行きと高さは、1段目が奥行き約20cm、高さ約10cm、2段目が奥行き約50cm、高さ約20cm、3段目は掘りきっていないため奥行きは不明であるが、高さは約50cmである。遺物は発見されない。層位は、地山の上に滑り落ちてきた第5,4,3層が堆積し、自然層である第2層がその上に堆積する。

トレンチ3：途中放棄のため記述省略。

トレンチ4(図5)：ほとんどの層がなだらかに傾斜して堆積しているため、すべて自然堆積層と考えられる。第4層が黒褐色砂質土の遺物包含層であるが、その下層の第8,7,6,5層のどれも傾斜して堆積しており、造成した痕跡は確認されなかった。出土品は第4層から2片発見された。

トレンチ5(図7)：明確に造成した痕跡は確認されなかった。トレンチ南部で切り立つように見える部分は地山の土質が砂質であることと、その砂質の地山が粘土質の地山に潜り込んでいることから、盛土や削平などの造成の痕跡ではなく、元々の旧地形がそうであったと考えられる。トレンチ北部の地山を垂直に切り込んでいるところはピットないしは溝であるのか、元来の地形がそのような状態だったのか、トレンチ内で判断はできない。基本的には地山の上にそれぞれの層が順番に堆積した自然層である。出土品は2片であり、1片は第2層から、1片は排土中から発見された。

トレンチ6(図8)：表土を約10cm剥ぐとすぐ地山であり、現在もほぼ旧地形を留めている場所である。排土中から「大正七年」銘の一銭硬貨が1枚発見された。

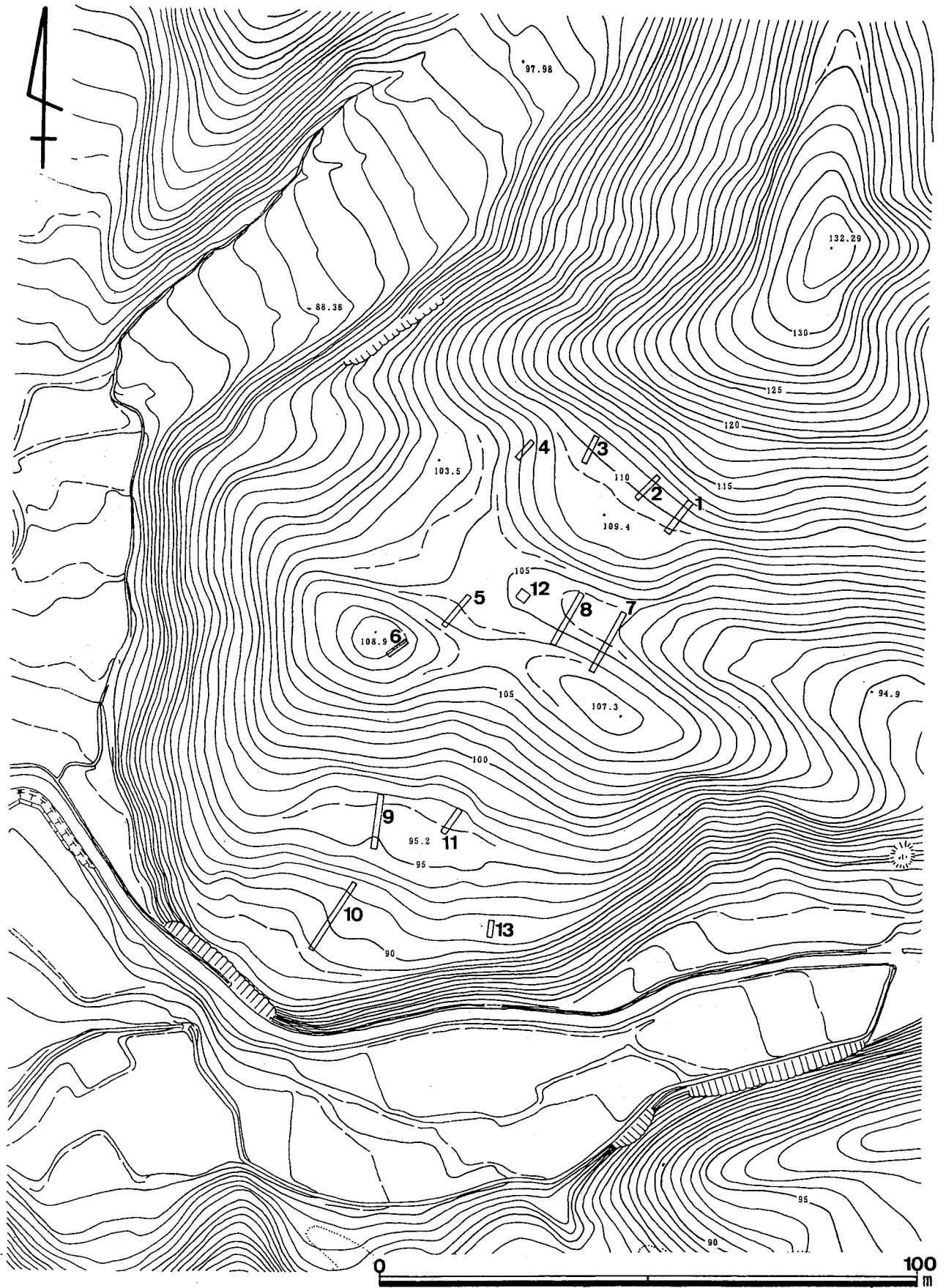


図 2 トレンチ配置図

- 第1層：表土層
- 第2層：灰褐色砂質土層
- 第3層：赤褐色砂質土層
- 第4層：黃褐色砂質土層
- 第5層：褐色砂質土層
- 第6層：灰黃色砂質土層
- 第7層：黑褐色粘土質土層
- 第8層：暗黃色砂質土層
- 地山：黃色粘土

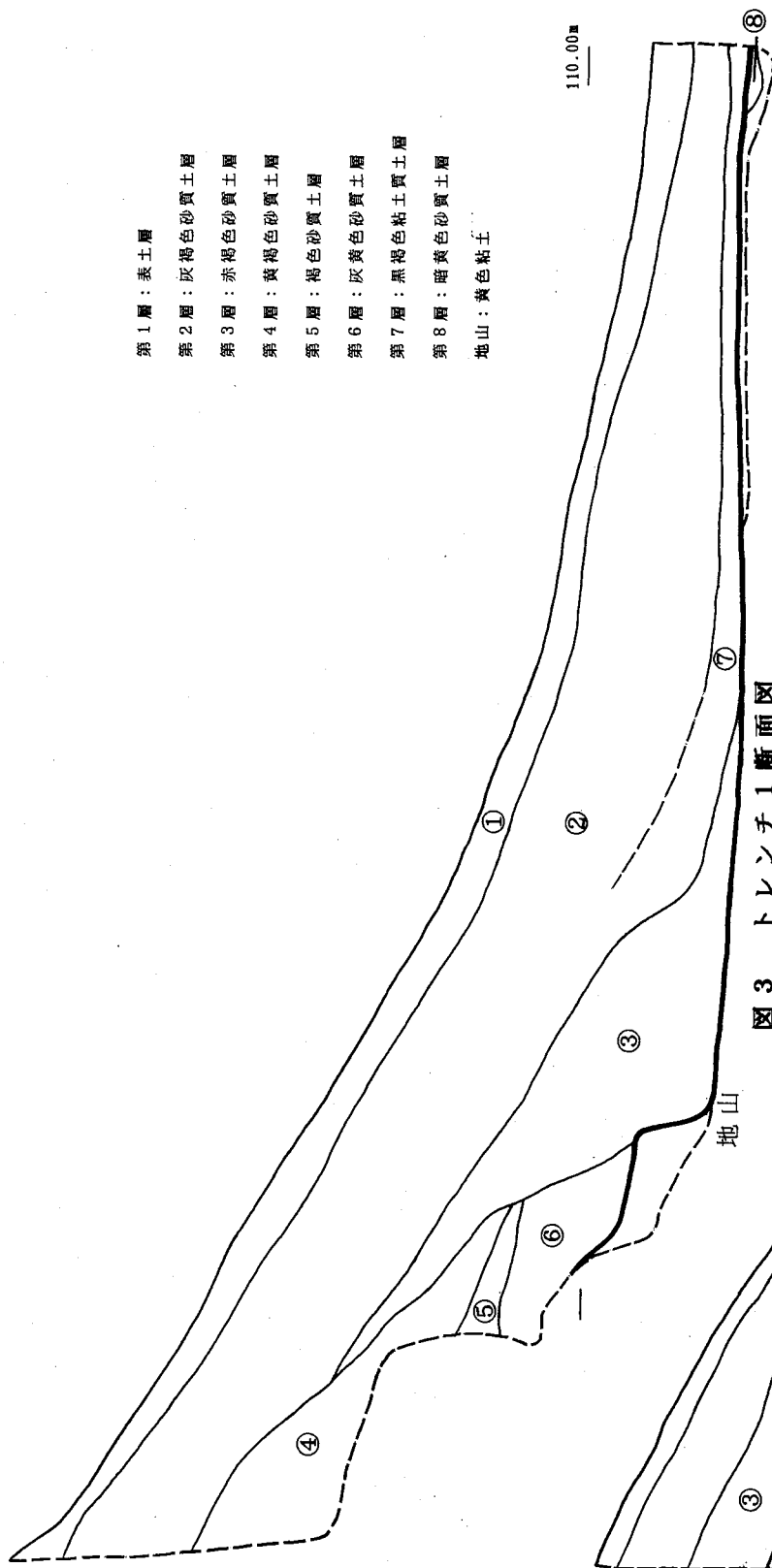


図3 トレンチ1断面図

- 第1層：表土層
- 第2層：灰褐色砂質土層
- 第3層：淡灰茶色砂質土層
- 第4層：淡灰茶色砂質土層
- 第5層：淡灰茶色砂質土層
- 第6層：茶色砂質土層
- 地山：黃色粘土

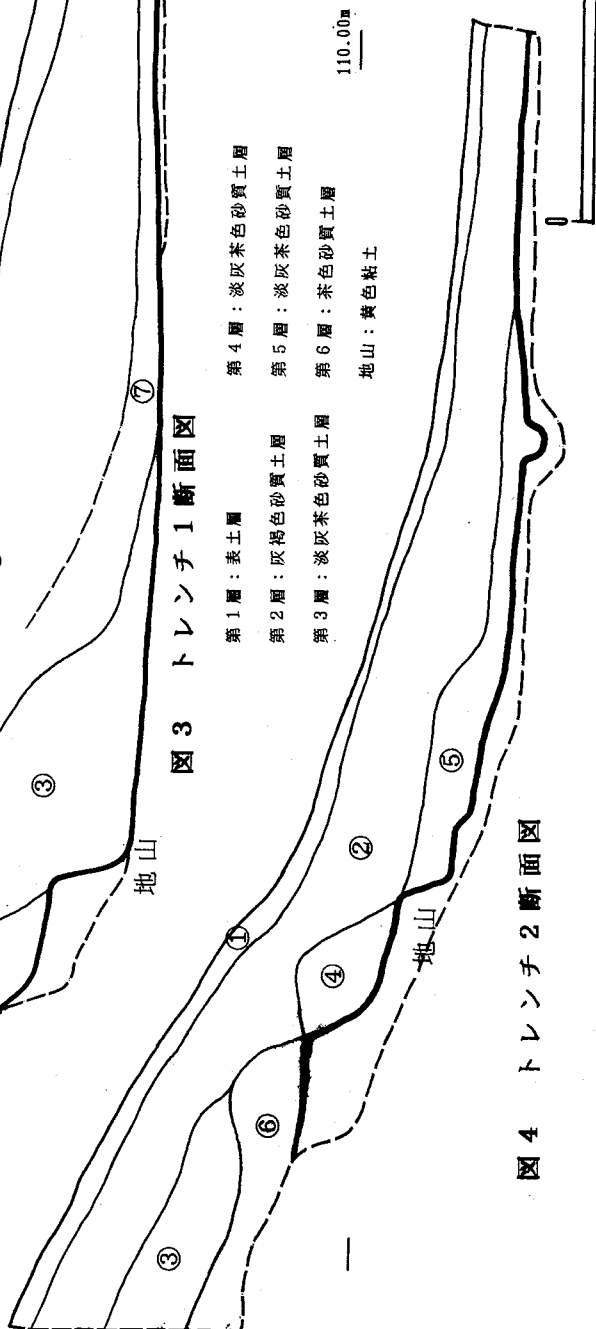


図4 トレンチ2断面図

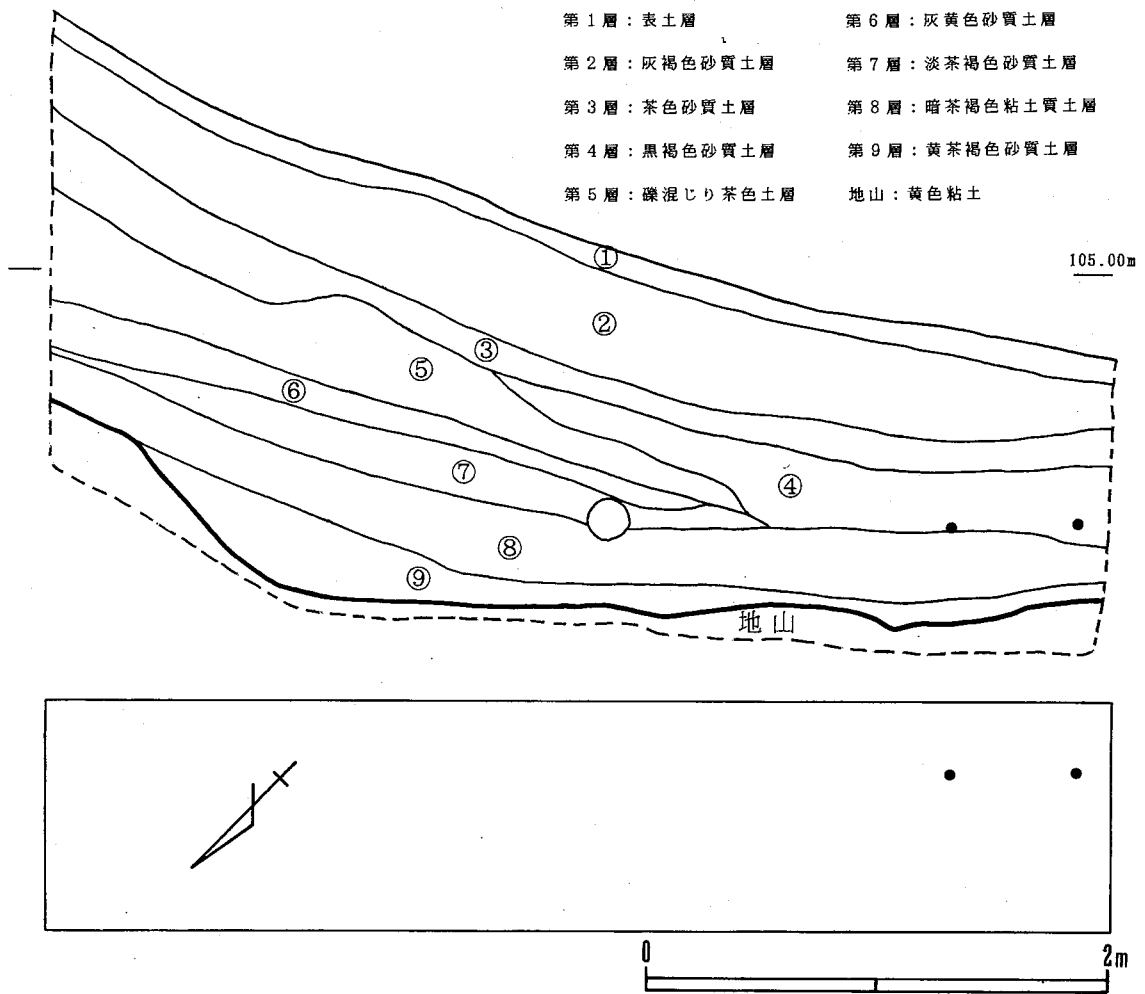


図5 トレンチ4断面図・遺物分布図

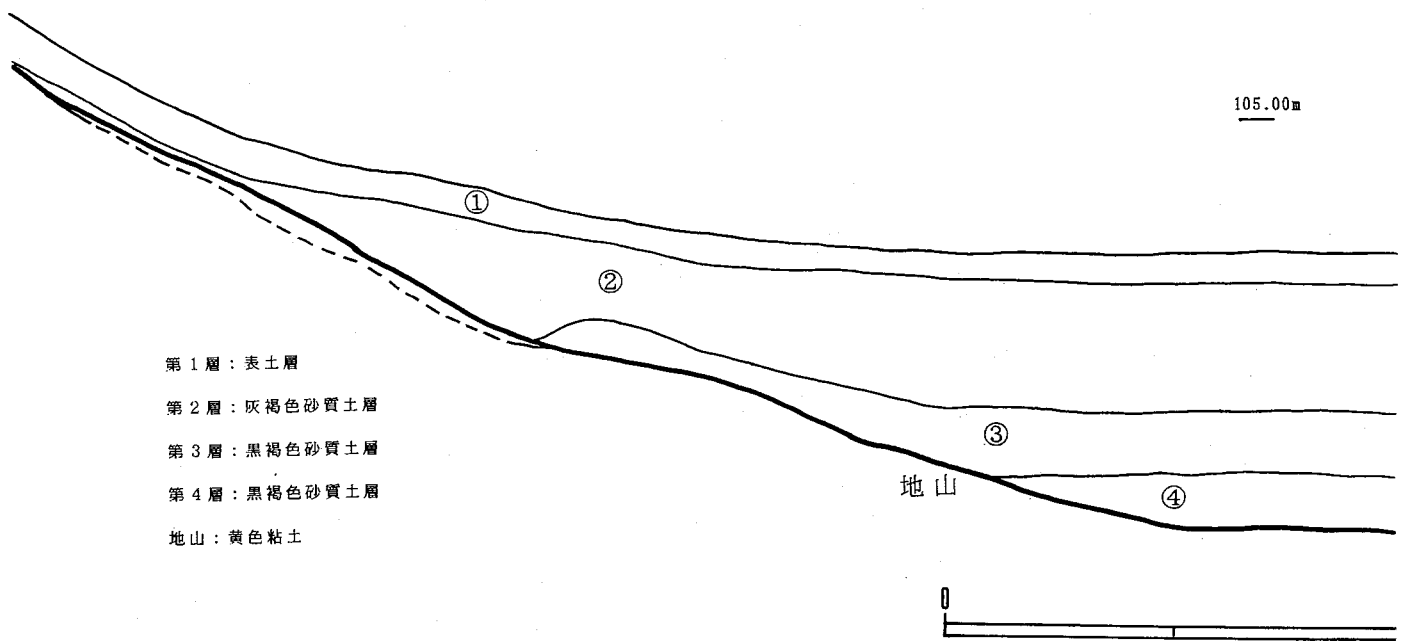


図6 トレンチ7断面図

- 第1層：表土層
- 第2層：灰褐色砂質土層
- 第3層：黒褐色砂質土層
- 第4層：礫混じり茶色土層
- 第5層：黒褐色砂質土層
- 第6層：黒褐色砂質土層
- 第7層：灰褐色砂質土層
- 第8層：暗灰褐色粘土質土層
- 第9層：暗灰褐色砂質土層
- 地山：黄色粘土，黄色砂質土

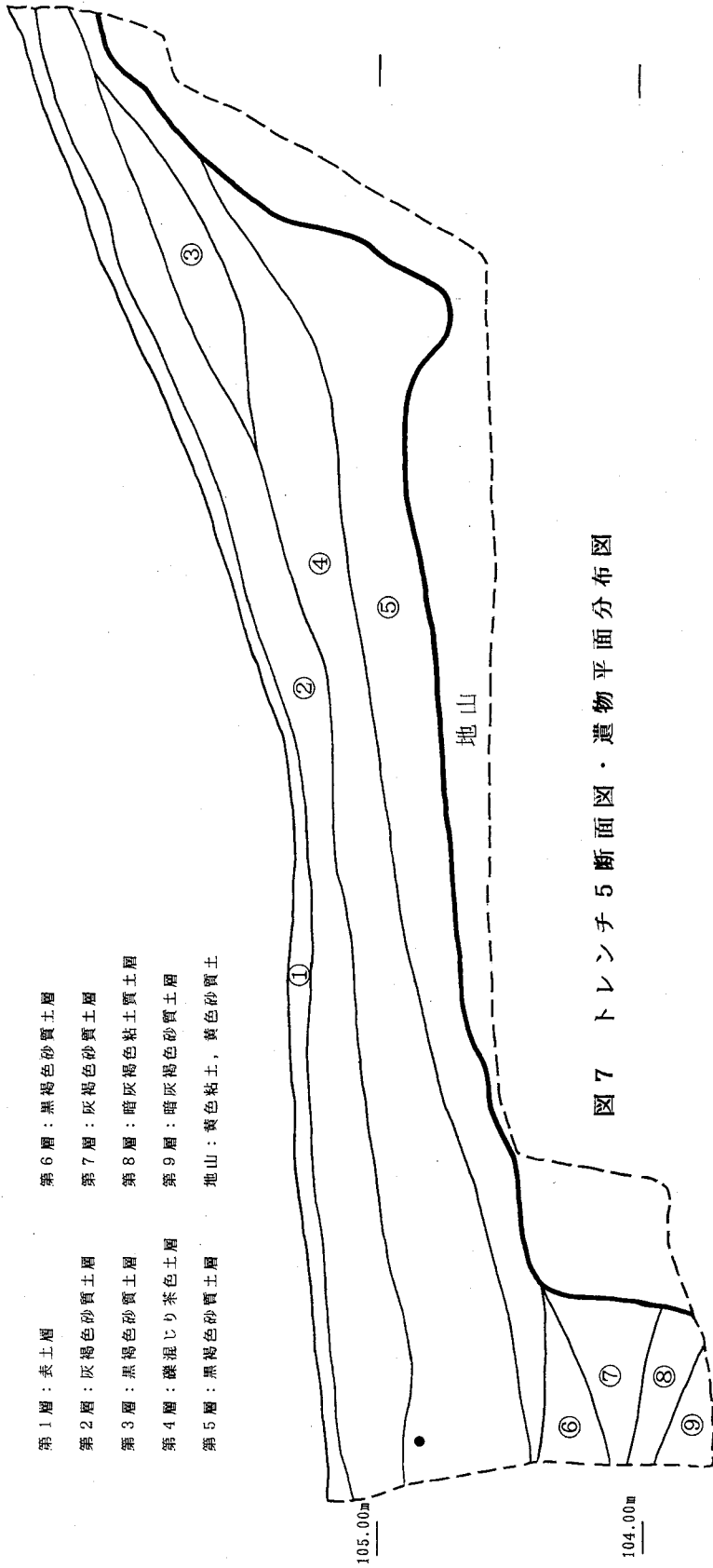
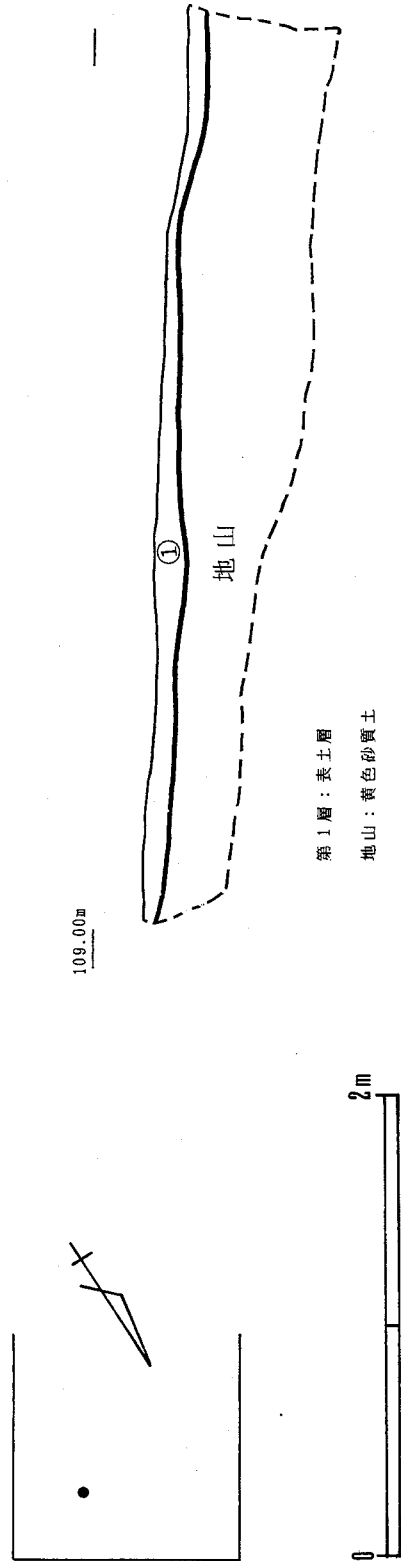


図7 トレンチ5断面図・遺物平面分布図

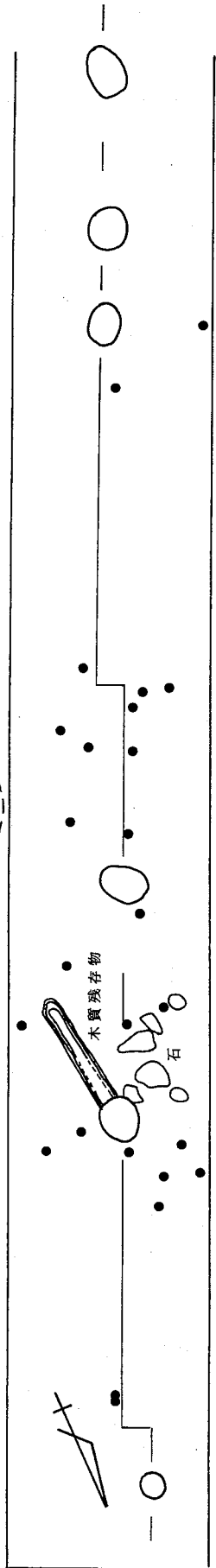
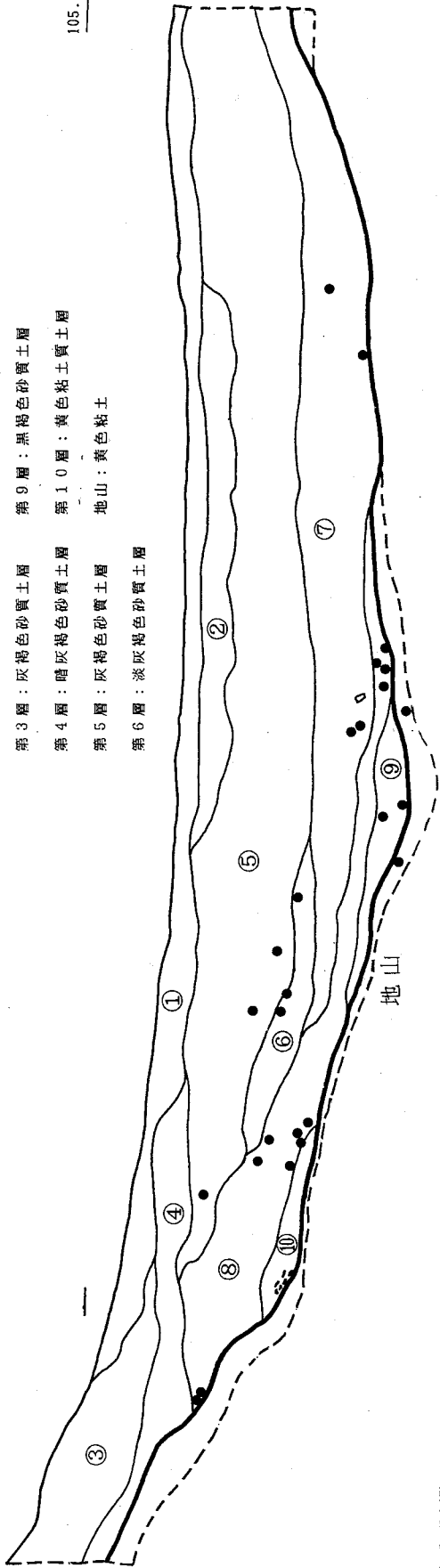


- 第1層：表土層
- 地山：黄色砂質土

図8 トレンチ6断面図

- 第1層：表土層
- 第2層：明灰褐色砂質土層
- 第3層：灰褐色砂質土層
- 第4層：暗灰褐色砂質土層
- 第5層：灰褐色砂質土層
- 第6層：淡灰褐色砂質土層
- 第7層：黑褐色砂質土層
- 第8層：黑褐色砂質土層
- 第9層：黑褐色砂質土層
- 第10層：黃色粘土質土層
- 地山：黃色粘土

105.00m



104.00m

図9 トレンチ8断面図・平面図・エレベーション図

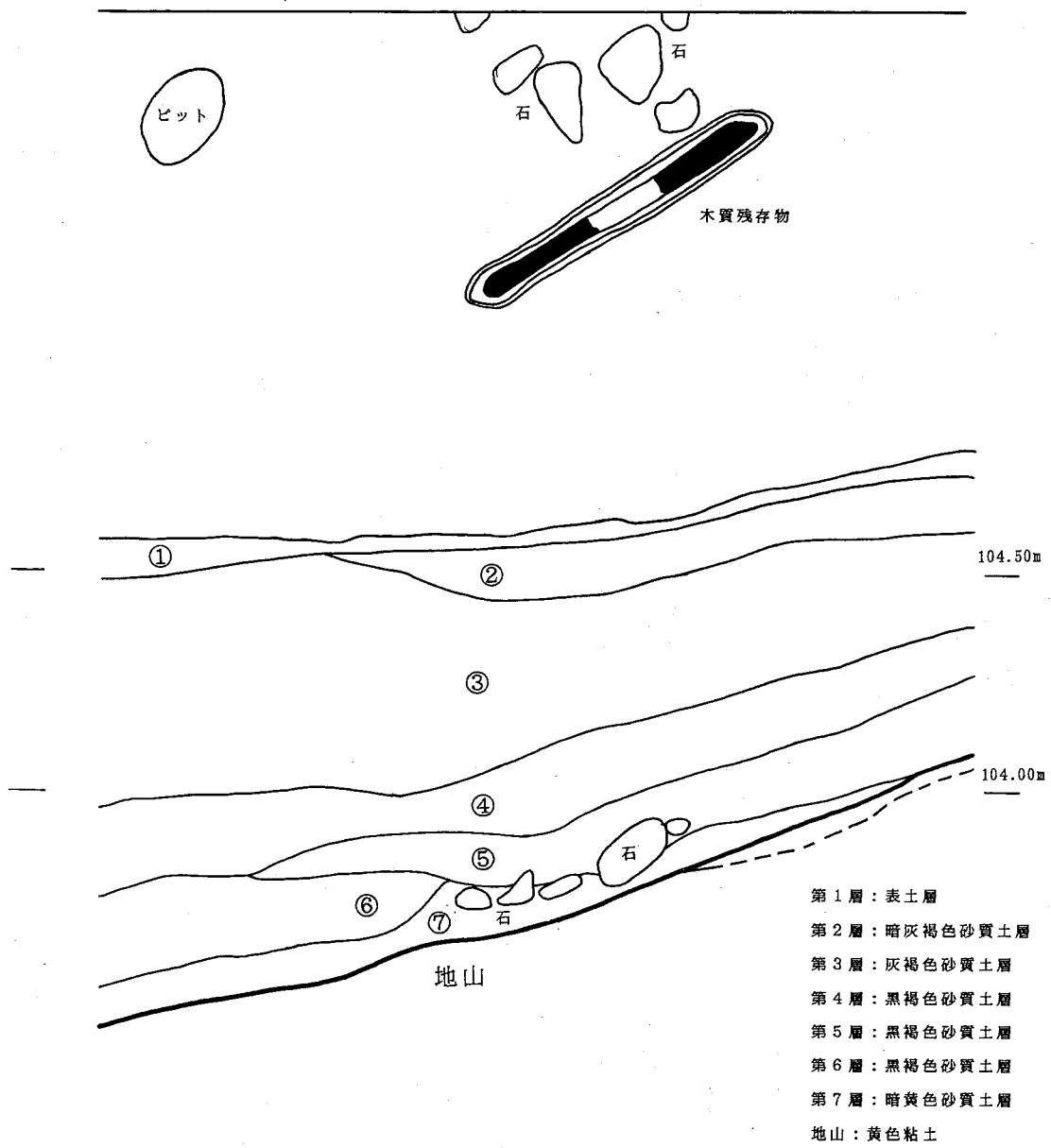


図10 トレンチ8集石部分断面図・平面図



写真1 遺跡全景

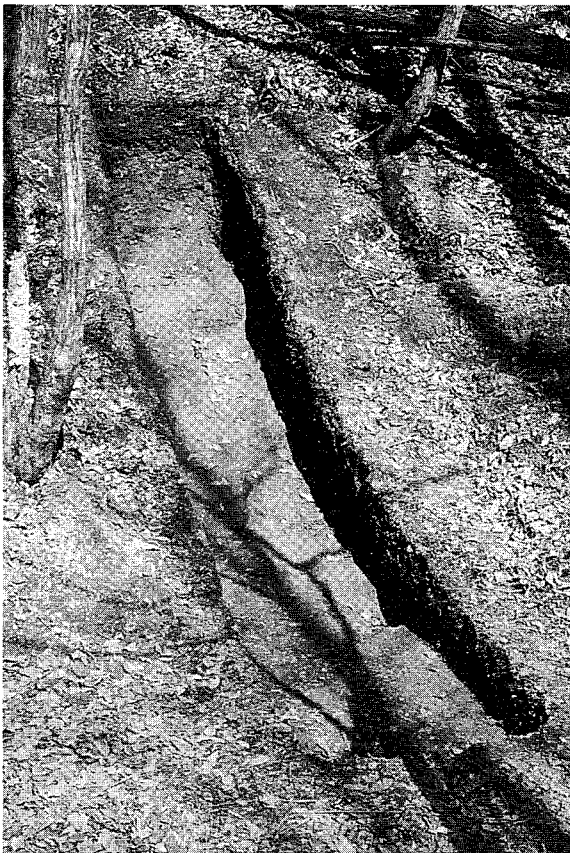


写真2 トレンチ2



写真3 トレンチ8



写真4 トレンチ10断面



写真5 トレンチ10 第3層 平面

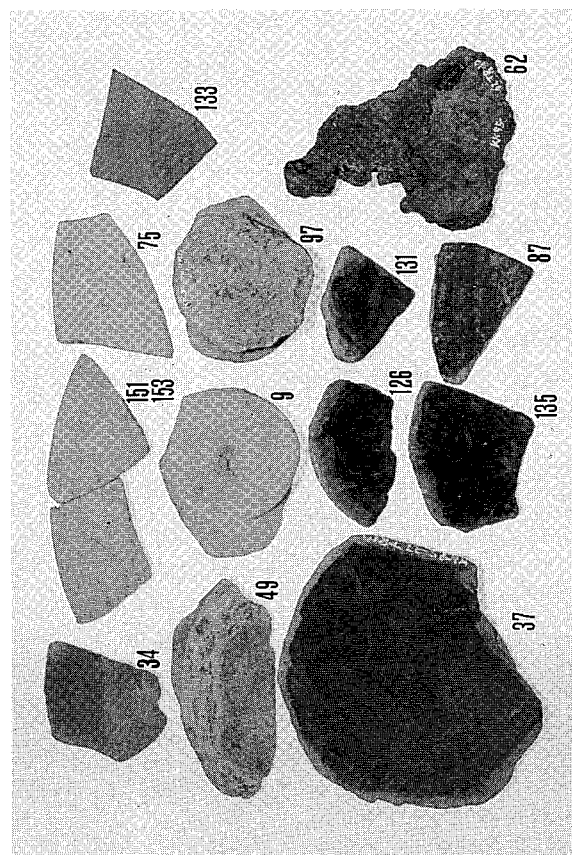
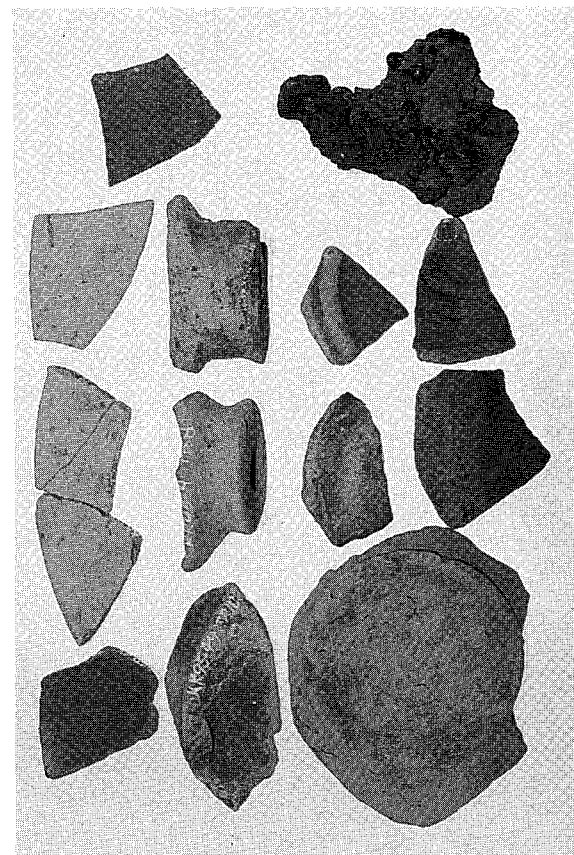


写真6 トレンチ出土品



トレンチ7(図6)：全層が斜面に沿って順番に堆積した自然層であり、遺物も発見されない。

トレンチ8(図9,10)：全層が造成の痕跡が観察されない自然層である。谷状の地山にそれぞれの層がなだらかに堆積している。しかし、全トレンチ中で唯一の遺構が発見されたトレンチである。遺構はすべてピットで、計6基である。北から順にピット1,2,3,4,5,6と番号を付けた。トレンチ幅が狭いため、建物の一部を成すかどうかは不明であるが、その規模から見て、杭列と考えられる。出土品は土師器27片であり、第5,6,7,8,9層から発見されている。

トレンチ9(図11)：すべて自然層である。落ち込んでいる地山部分を埋めて第7-14層が平坦面を造成したようにも見えたが、版築などを行った際に表れるであろう土層の境界が明瞭でないことから、人工的な層ではなく、地滑り層あるいは自然層と判断した。第1-6層も自然層である。土師器が第5層から1片発見されている。

トレンチ10(図13,14)：基本的には自然堆積層であるが、土師器を集中的に包含しているトレンチ北部の第3層は上位平坦面から一括投棄されたものである可能性がある。トレンチ内の他の部分でも土師器が散在している。遺物の数量は全トレンチ中最多で、土師器73片、鉄滓1点である。第3層の黒褐色砂質土層で土師器55片が出土している。断面図では第2層から遺物が大量に出土したように見えるが、これはトレンチが東西で傾斜しているため、そう見えるものであり、実際は第3層で発見されたものである。

トレンチ11(図12)：トレンチ9と同じ平坦面に設定したトレンチである。全層が造成の痕跡の確認されない、斜面上から逐次堆積した自然層である。遺物は土師器が24片発見されており、そのうちの19片が第4層の黒褐色砂質土層からである。

トレンチ12(図15)：第4層の礫混じり茶色土層が平坦面を造成した際の盛土とも考えられるが、2m四方のトレンチでは判断ができないため、現在のところは自然層と解釈する。遺物は第3層の黒褐色土層から6片発見された。蓋と思われる須恵器1片が発見されたトレンチである。須恵器の出土例はこれだけである。

トレンチ13(図16)：全層が斜面に沿ってなだらかに堆積する自然層である。土師器が17片発見された。そのうちの14片が第4層の黒褐色砂質土層からの出土である。

V. 出土品

今回の発掘で発見した遺物は計150片である(図17, 表1 出土遺物観察表)。土師器が147片を占めるが、その他は須恵器蓋1片、鉄滓、大正時代の貨幣である。

土師器の器種は椀がほとんどであり、それ以外には小皿、杯と思われるものがある。椀の胴部の立ち上がりは直線的になるものが多く、大きさは口径約9cmの小型のものから18cm程度の大型のものまでである。

土師器には内面を黒色処理されるものとされないものがある。内面が黒色処理されるものは概して器壁が薄く、立ち上がりの傾斜のきついもの、そして高台をもつものに顕著である。高台をもたないもので内面が黒色となるものは1片のみである。さらに内面黒色のものは他と比べて胎土もきめ細かいことから、いわゆる精製品と考えられる。全体的に見て甕胴部と思われる1片を除いて、壺、甕などの貯蔵用具や鍋、釜などの煮沸用具が出土していないことが注目される。

以下、実測した遺物のうち写真撮影したものについて観察所見を記す。

KK95-37、KK95-126、KK95-131は、内面黒色処理の施される高台付の土師器椀の底部である。すべてはロクロ成形と思われ、付高台である。37はトレンチ10、第5b層から出土し、高台を指でなで整形

- 第1層：表土層
 - 第2層：灰褐色砂質土層
 - 第3層：黃褐色砂質土層
 - 第4層：灰褐色砂質土層
 - 第5層：黑褐色砂質土層
 - 第6層：黃褐色砂質土層
 - 第7層：灰褐色砂質土層
 - 第8層：黑褐色砂質土層
 - 第9層：灰褐色砂質土層
 - 第10層：黑褐色砂質土層
 - 第11層：黃褐色砂質土層
 - 第12層：灰褐色砂質土層
 - 第13層：灰褐色砂質土層
 - 第14層：黑褐色砂質土層
- 地山：黃色粘土

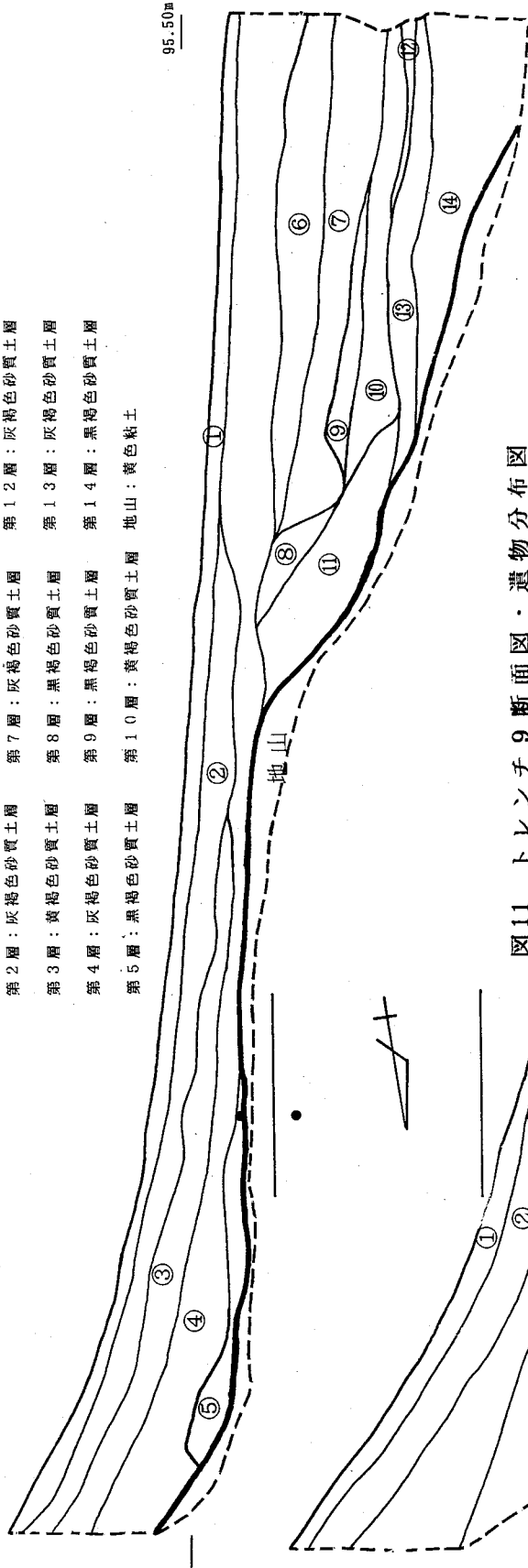


図11 トレンチ9 断面図・遺物分布図 96.00m

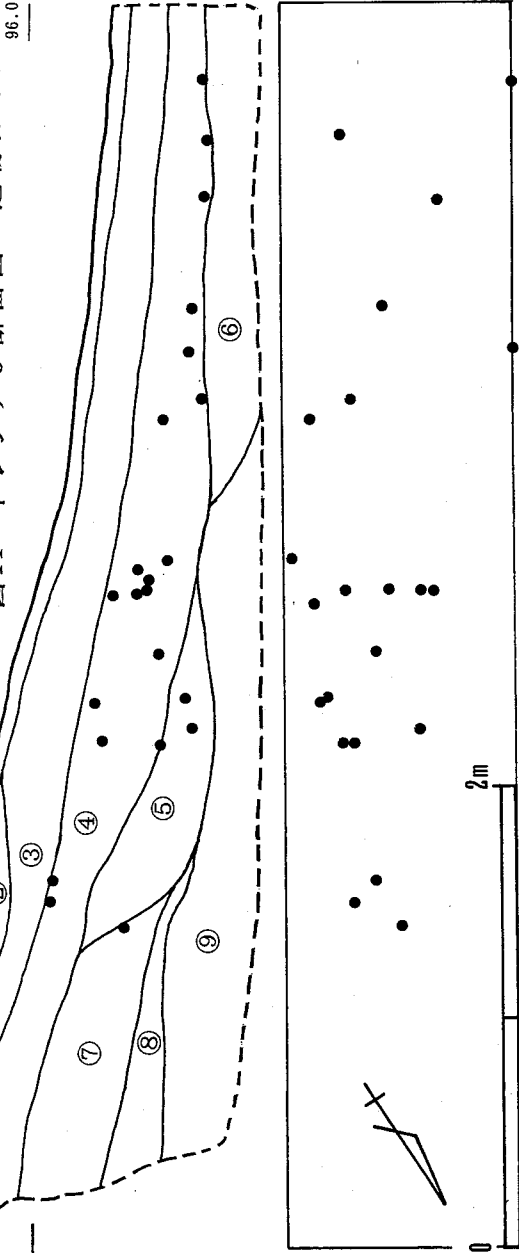
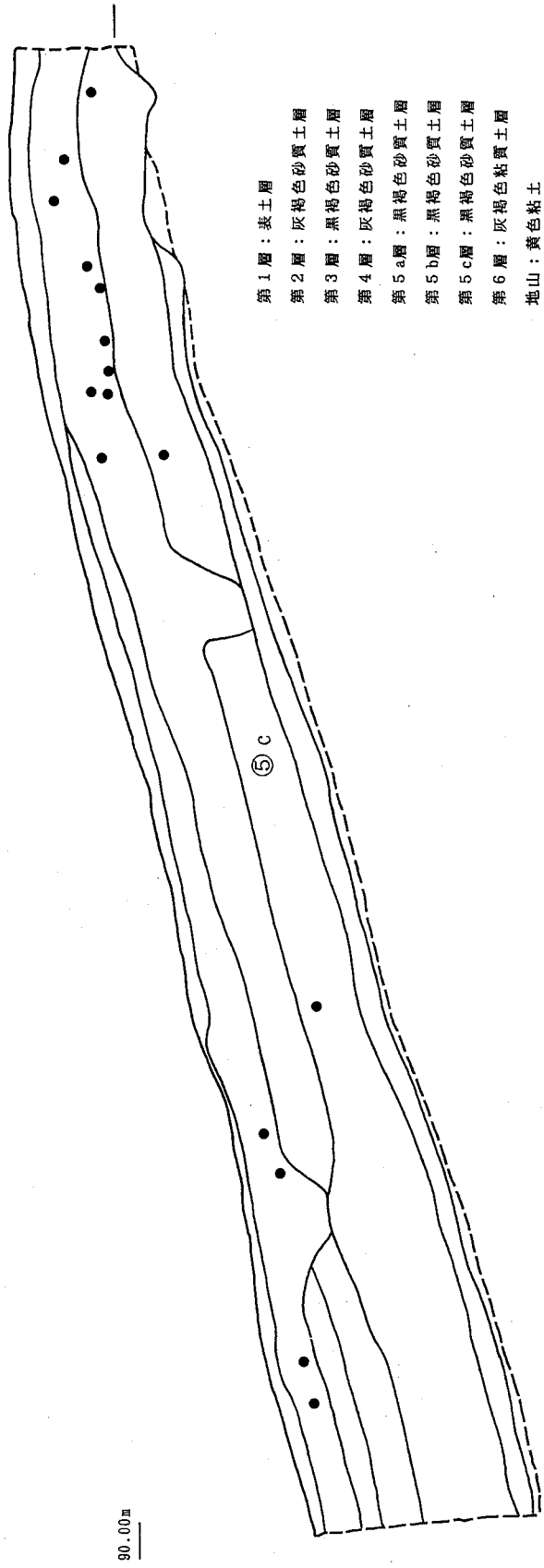


図12 トレンチ1.1 断面図・遺物分布図

- 第1層：表土層
- 第2層：灰褐色砂質土層
- 第3層：灰褐色砂質土層
- 第4層：黑褐色砂質土層
- 第5層：黑褐色砂質土層
- 第6層：灰褐色砂質土層
- 第7層：礫混じり茶色層
- 第8層：灰褐色砂質土層
- 第9層：灰褐色砂質土層



図13 トレンチ10北部断面図・遺物分布図



- 第1層：表土層
- 第2層：灰褐色砂質土層
- 第3層：黑褐色砂質土層
- 第4層：灰褐色砂質土層
- 第5a層：黑褐色砂質土層
- 第5b層：黑褐色砂質土層
- 第5c層：黑褐色砂質土層
- 第6層：灰褐色粘質土層
- 地山：黃色粘土

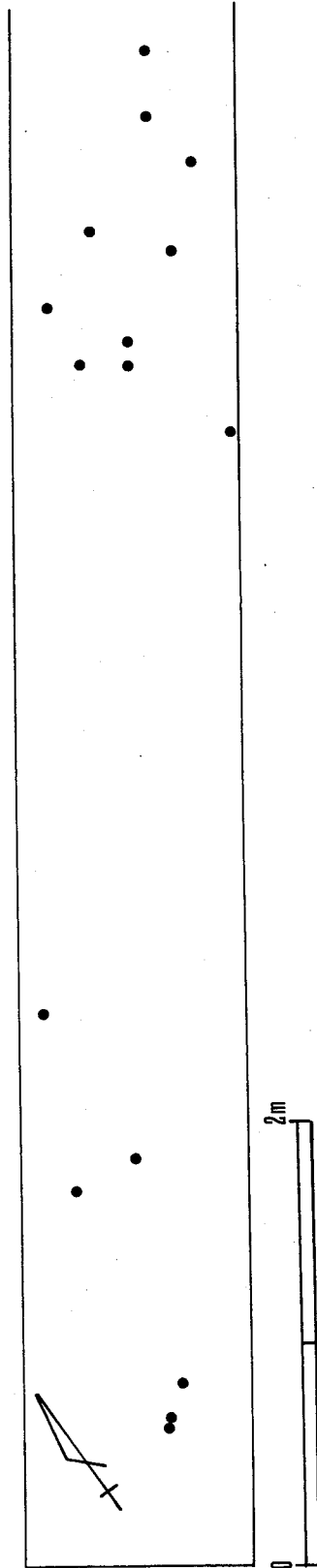
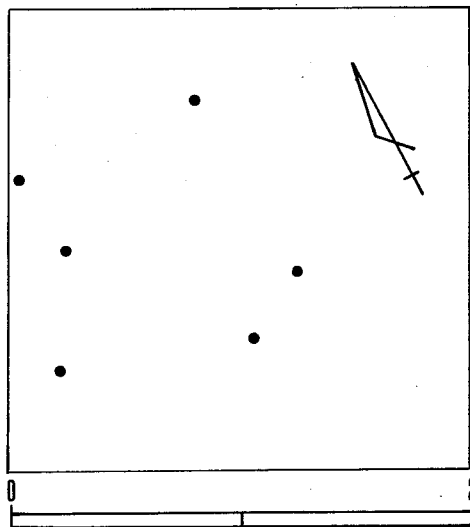
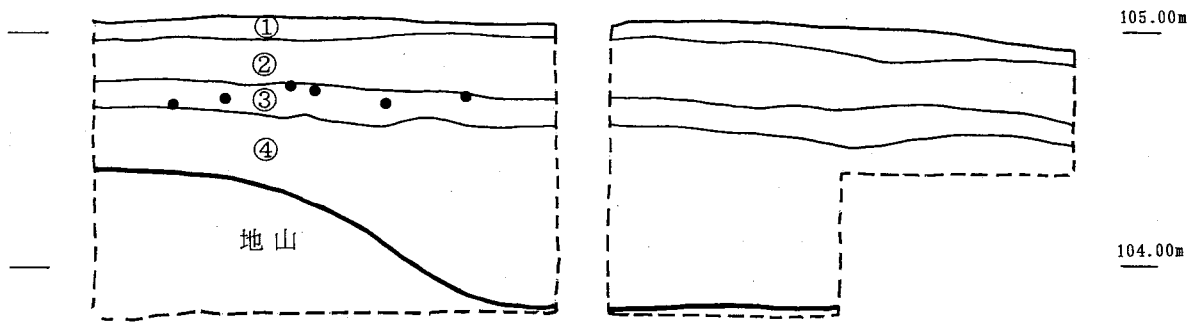
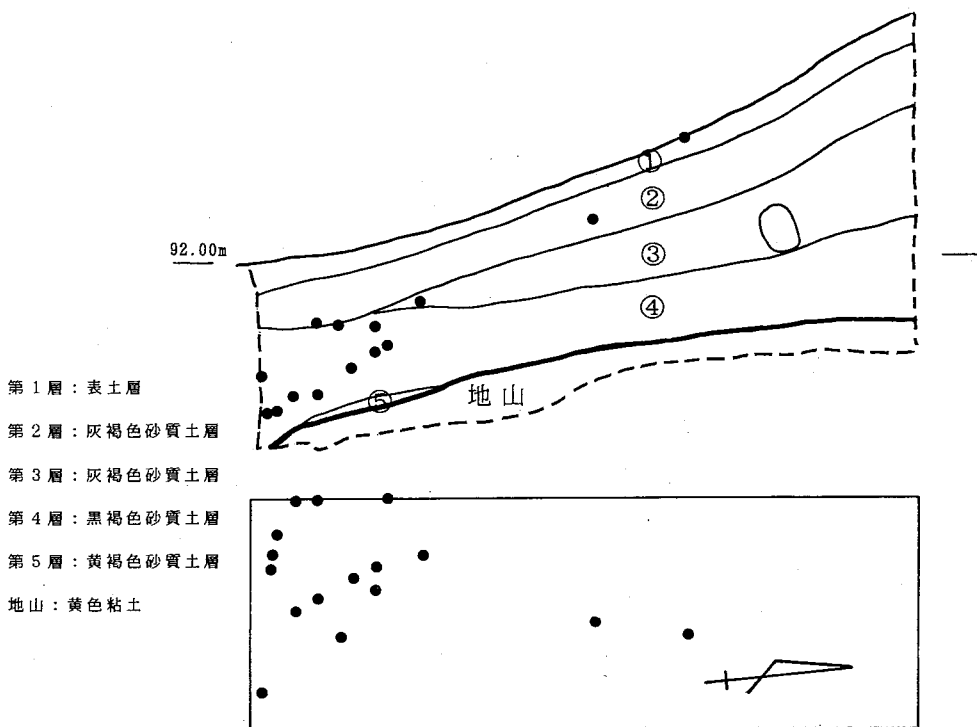


図14 トレンチ10南部断面図・遺物分布図



- 第1層：表土層
- 第2層：茶色砂質土層
- 第3層：黒褐色砂質土層
- 第4層：礫混じり茶色土層
- 地山：黄色砂質土

図15 トレンチ1 2 断面図・遺物平面分布図



- 第1層：表土層
- 第2層：灰褐色砂質土層
- 第3層：灰褐色砂質土層
- 第4層：黒褐色砂質土層
- 第5層：黄褐色砂質土層
- 地山：黄色粘土

図16 トレンチ1 3 断面図・遺物分布図

表1 出土遺物観察表

番号	遺物名	部位	調整	ト/フ	層位	備考	番号	遺物名	部位	調整	ト/フ	層位	備考
1	土師器	口縁部	内黒	5	4		78	土師器	胴部		10	4	
2	土師器	胴部		8	8		79	土師器	胴部		10	4	
3	土師器	胴部	内黒	8	8		80	土師器	胴部		10	4	
4	土師器	胴部	内黒	4	4		81	土師器	底部		10	3a	
5	土師器	胴部	内黒	8	5		82	土師器	口縁部		10	3a	
6	土師器	底部	高台付	8	5	高台部黒色	83	土師器	底部	外底面糸切り痕	11	4	内底面と胴部の境に調整痕
7	土師器	口縁部	内黒	8	5		84	土師器	胴部		8	11	
8	土師器	口縁部		5			85	土師器	胴部		10	4	
9	土師器	底部	糸切り高台付	8	8	西10cmのビット2直上	86	土師器	胴部		11	4	
10	土師器	胴部		8	6		87	土師器	胴部	外面平行叩・内面同心円叩	10	3a	外面が黒色を呈する
11	土師器	胴部		8	7		88	土師器	口縁部		10	3a	
12	土師器	胴部		8	6		89	土師器	底部	高台付	10	3a	
13	土師器	胴部		8	7		90	土師器	口縁部		10	3a	口縁部に調整による歪み
14	土師器	胴部		8	5		91	土師器	口縁部		10	3a	
15	土師器	胴部	内黒	4	4	黒色物質(炭化物?)内面付着	92	土師器	胴部		10	3a	
16	土師器	胴部	内黒	8	8		93	土師器	口縁部		10	3a	
17	土師器	口縁部		8	8		94	土師器	口縁部		11	4	
18	土師器	胴部		8	8		95	土師器	胴部		10	3a	
19	土師器	胴部		8	8	外面に煤付着	96						欠番
20	土師器	口縁部		8	8		97	土師器	底部	高台部糸切り痕	11	4	内底面渦巻状調整痕
21	土師器	胴部		8	7		98	土師器	口縁部	内黒	10	3a	内面磨きあり
22	土師器	胴部		8	8		99	土師器	胴部		10	3a	内底面同心円状調整
23	土師器	胴部		8	8	遺物粉状のため注記せず	100	土師器	胴部		10	3a	
24	土師器	胴部		8	9		101	土師器	口縁部		11	4	
25	土師器	胴部		8	8		102	土師器	底部		11	4	磨減により調整不明
26	土師器	胴部		8	7		103	土師器	底部	外底面糸切り痕	10	3a	
27	土師器	胴部		10	3a		104	土師器	胴部	内黒	10	3a	
28	土師器	胴部		10	4		105	土師器	口縁部		11	4	
29	土師器	口縁部	内黒	10	3a		106	土師器	胴部		11	4	
30	土師器	口縁部		9	5		107	土師器	口縁部		10	3a	
31	土師器	口縁部	内黒	10	3a		108	土師器	胴部		10	3a	
32	土師器	口縁部		10	3b		109	土師器	口縁部		10	3a	
33	土師器	胴部	内黒	8	8		110	土師器	胴部		10	4	
34	土師器	口縁部	内外面黒色	10	3a		111	土師器	胴部		10	3a	
35	土師器	底部	外底面糸切り痕	10	3b		112	土師器	胴部	内黒	10	3a	内面(黒色面)に磨きあり
36	土師器	胴部		10	不明	底部の可能性	113	土師器	底部	高台付	10	3a	糸切り難し後高台接着
37	土師器	底部	高台付・内黒	10	5b	内底部黒色面に磨き	114	土師器	底部	外底面糸切り痕	11	4	遺物119と接合
38	土師器	胴部		10	4		115	土師器	胴部		11	4	
39	土師器	胴部		10	3a		116	土師器	胴部		10		
40	土師器	底部	外底面糸切り痕	10	3a		117	土師器	底部	外底面糸切り痕	11	4	
41	土師器	胴部		10	4	底部の可能性あり	118	土師器	胴部		11	4	
42	土師器	底部	外底面糸切り痕	10	4		119	土師器	底部	外底面糸切り痕	11	4	遺物114と接合
43	土師器	胴部		10	3b	底部の可能性あり	120	土師器	口縁部		11	4	
44	土師器	胴部		10	4	底部の可能性あり	121	土師器	口縁部		11	4	
45	土師器	胴部		10	3a		122	土師器	底部		11	5	
46	土師器	胴部		10	3a		123	土師器	胴部		11	4	
47	土師器	胴部		10	3a		124	土師器	胴部		11	4	
48	土師器	口縁部	内黒	10	3a		125	土師器	口縁部		11	5	
49	土師器	底部	高台付	10	3a		126	土師器	底部	内黒・高台付	10		内底面磨きあり
50	土師器	胴部		10	3a		127	土師器	胴部		11	5	
51	土師器	口縁部		10	3a		128	土師器	胴部		8	11	
52	土師器	胴部		10	4		129	土師器	底部	内黒・高台付	13	1	内底面磨きあり
53	土師器	底部	外底面糸切り痕	10	3b	遺物55と接合	130	土師器	口縁部		13	2	
54	土師器	口縁部	内黒	8	9		131	土師器	底部	内黒・高台付	12	3	
55	土師器	底部	外底面糸切り痕	10	3b	遺物53と接合	132						欠番
56	土師器	胴部		10	4		133	須恵器	蓋部分		12	3	内外面に同心円状調整痕
57	土師器	胴部		10	4		134	土師器	底部		12	3	
58	土師器	口縁部		11	4		135	土師器	底部	内黒・糸切り痕	12	3	内底面磨きあり
59	土師器	胴部		10	4		136	土師器	胴部		12	3	
60						欠番	137	土師器	胴部		13	3	
61	土師器	胴部	内黒	10	4		138	土師器	口縁部		13	2	
62	鉄鉋			10	3a	鉄製品の可能性あり	139	土師器	胴部		13	4	
63	土師器	口縁部		10	3a		140	土師器	胴部		13	4	
64	土師器	底部	外底面糸切り痕	10	3a		141	土師器	口縁部		10	4	
65	土師器	底部	高台付	10	3a		142	土師器	胴部		13	4	
66	土師器	底部		10	3a		143	土師器	胴部		13	4	
67	土師器	口縁部		10	3a		144	土師器	口縁部		13	4	
68	土師器	胴部		10	3a	高台の付く可能性あり	145	土師器	胴部		13		
69	土師器	口縁部		10	3a		146	貨幣			13		「大正七年」銘・一銭銅貨
70	土師器	胴部		10	3a		147	土師器	底部	外底面糸切り痕	13	4	
71	土師器	胴部		10	3a		148						欠番
72	土師器	口縁部		10	3a		149	土師器	底部	外底面糸切り痕	13	4	遺物152と接合
73	土師器	胴部		10	3a		150	土師器	胴部		13	4	
74	土師器	底部	外底面糸切り痕	10	3a		151	土師器	口縁部		13	4	
75	土師器	口縁部		10	3a		152	土師器	底部	外底面糸切り痕	13	4	遺物149と接合
76	土師器	口縁部	内黒	10	3a		153	土師器	口縁部		13	4	
77	土師器	底部		11	4		154	土師器	口縁部		8	7	

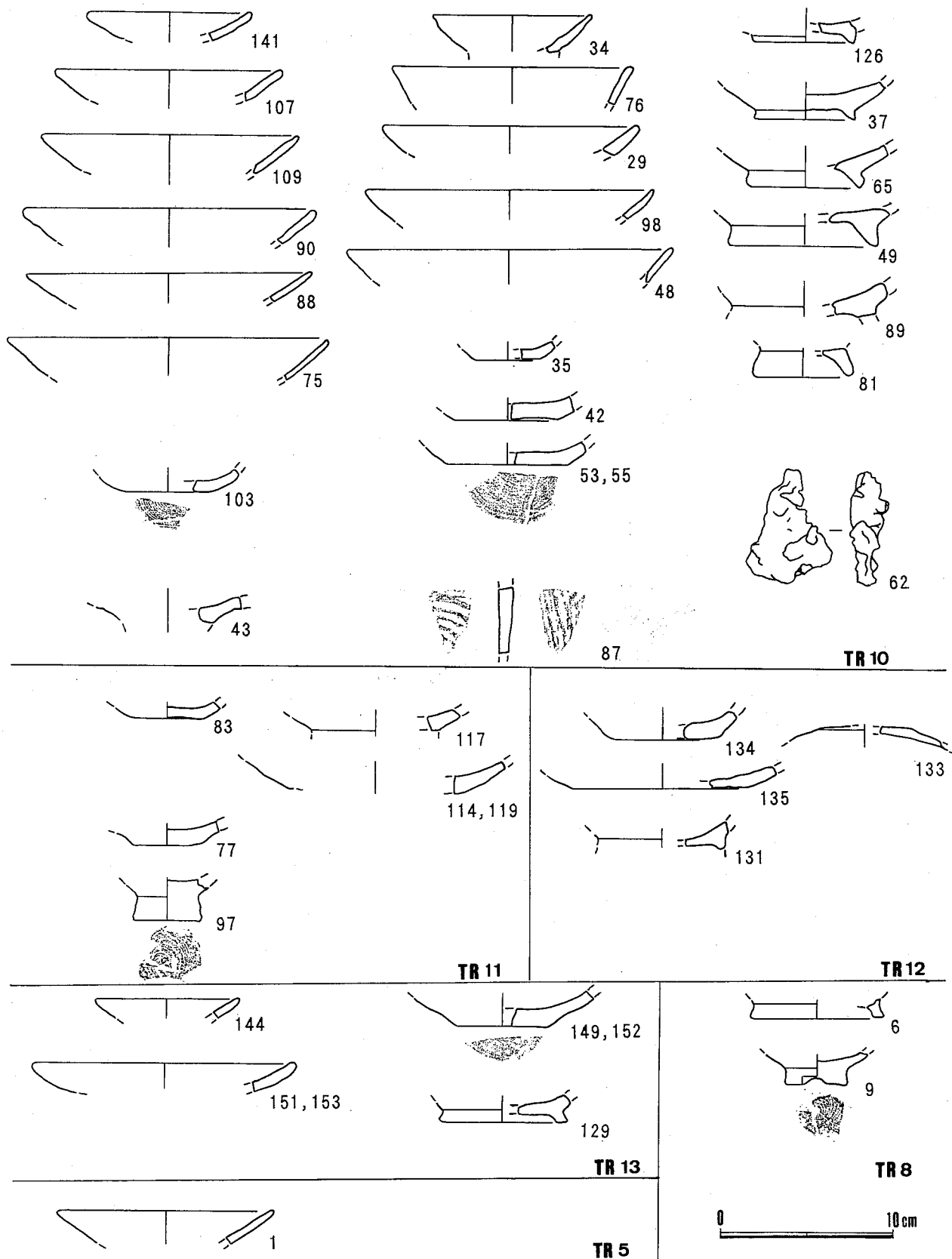


图17 出土遗物实测图

しており、内面は削って整形している。胎土は、赤みがかかった淡い黄褐色を呈する。胴部器壁は外方に向かって直線的に立ち上がる。高台径5.9cm。126はトレンチ10、排土中から出土し、他の黒色処理の施される土師器に比べ、胎土への炭素の浸透する度合いが高く、内面の黒色はつやがある。胎土は黄褐色を呈する。高台径5.8cm。131はトレンチ12、第3層から出土し、内面の黒色はあまりつやがない。胎土は褐色で粉質である。底径7.4cm。

KK95-135はトレンチ12、第3層から出土した内面黒色処理の施される無台の土師器碗の底部である。内面はつやのある黒色を呈する。ロクロ成形。底部に糸切り痕がある。胎土は黄褐色を呈する。底径10.0cm。

KK95-49はトレンチ10、第3a層から出土した付高台の土師器碗の底部である。ロクロ成形であり、内面に指でなでて整形した痕が残る。胎土は暗い黄褐色を呈し、粉質である。底径8.4cm。

KK95-34、KK95-75、KK95-151、153は土師器の口縁部であり、すべてロクロ成形と思われる。34はトレンチ10、第3a層から出土し、口径9.2cmと小ぶり、胎土は灰褐色を呈する。同じくトレンチ10、第3a層から出土した75は外方に向かってほぼ直線的に立ち上がる。器壁の厚さは約4mmで他の土師器碗に比べ薄い。胎土は赤みがかかった黄褐色を呈し、粉質である。口径18.6cm。トレンチ13、第4層から出土した151、153の2片は接合した。外方に向かってほぼ直線的に立ち上がる。胎土は赤みがかかった淡い黄褐色を呈し、他の土器に比べきめが細かい。口径15.0cm。

KK95-9、KK95-97はベタ高台付（小皿に高い高台を付けたもの）燈明台（『漆町遺跡Ⅰ』では燈明台と呼んでいる）であり、いずれもロクロ成形と思われる。9はトレンチ8、第8層から出土し、底部には不定形のくぼみがある。煤の付着のためか、内面中央が若干黒くなっている。胎土は明るい黄褐色を呈し、粉質である。底径3.6cm。97はトレンチ8、第8層から出土し、底部に糸切り痕が残る。胎土は赤みがかかった淡い黄褐色を呈する。底径4.0cm。

KK95-87はトレンチ10、第3a層から出土した土師器甕の胴部と思われる。叩き成形の痕跡が明瞭に残る。外面表面は煤が付着しているため、やや黒色を呈する。胎土は明るい黄褐色を呈する。

KK95-133はトレンチ12、第3層から出土した段の1つついた須恵器蓋の破片と思われる。須恵器の出土はこの1点のみである。胎土は青みがかかった灰褐色で堅い。

KK95-62はトレンチ10、第3a層出土の鋳滓（鉄滓?）である。この地点で鑄造関連の作業が行われていた可能性を示唆するものと思われる。

VI. 出土土器から見た遺跡の年代

前述の通り、今回出土した遺物の大半は土器、それも土師器である。加賀地域においてほぼ同時期の遺跡として挙げられるのは小松市の漆町遺跡[石川県埋蔵文化財センター 1986]である。梯川中流域に位置するこの遺跡は弥生時代から中世までの大規模な複合遺跡である。その発掘報告書には、9世紀後半から13世紀にかけての土師器について、田嶋明人氏による編年案が提示されている。それは基本的には吉岡康暢氏による東大寺領横江庄遺跡出土土器の編年に依拠しつつ、漆町遺跡出土の該期の土師器を3段階、12小期に細分するものである。ここでは、今回出土の土器の時期をその編年案にそって考えてみる。

まず第1に、土師器147片に対し須恵器が1片しか出土しないことが特筆される(図17-133)。このような状況は漆町遺跡1段階V2・V3期(10世紀前半から11世紀前後)に相当する。

第2に、出土品の大部分を占める高台をもたない碗の器形は、漆町遺跡1段階におけるCタイプ(口縁がやや内湾気味であるが、ほぼ直線的に外方に伸びるタイプ)のものが多。また、有台(高

台付) 椀についてはCタイプに高台が付いたものと思われる漆町遺跡報告書171図の1,2に類似している。全体的な土師器の形態からみると、当遺跡の主要な時期は漆町遺跡の1段階にあたりと考えられる。

第3に、土師器のうち内面黒色処理を施すものが21片、内外面黒色処理を施すものが1片出土しており、これは土師器全体に占める割合が約14%である。このことは漆町遺跡1段階V3期に近似する現象である。

第4に、小皿に高いベタ高台(脚)を付けるものが2片出土しているが(図17-9,97)、これは漆町遺跡では11世紀後半に初めて現れる。その2段階Ⅷ1期の形態はベタ高台(脚)が垂直になるものであり、2段階Ⅷ2期に降ると高台の下面の方が広い台形状になるものに変化する。今回出土したのものには高台が垂直に立ち上がるものと内側に傾くものがそれぞれ1片ずつあるため、11世紀後半ないし末から12世紀中頃に至る年代が与えられることになる。

以上の4点から、当遺跡の年代は10世紀前半から12世紀中頃の間にあると推定できる。

VII. 歴史環境からみた遺跡の特徴

角間地区近辺で10世紀前半から12世紀中頃、すなわち平安時代の中・後期に比定できる時期の遺跡はほとんど見当たらない。遺跡から浅野川流域に出る地域は現在の田上地区であるが、この地域は埋蔵文化財の調査を行わずに宅地造成工事が行われた。そのため、遺跡のすぐ西側地区は浅野川のゆるやかな南斜面であり、遺跡の存在が十分に推定できるのだが、現在は遺跡の空白地域になっている。奈良時代後期から平安時代前期の遺跡として知られる末古窯址群は、当遺跡の南方向にあたる浅野川西岸の丘陵斜面に位置している(図1)。

発見された遺跡は、平野部やその縁辺に立地するのではなく、平野から小さな谷沿いに山間地に少し入った山の斜面に立地している。遺跡から見て西側、すなわち現在の田上町方向にわずかばかりの視界が開けているものの、決して浅野川流域の平野部から十分に望見できる位置ではない。また、当遺跡は山腹に狭小な平坦面を造成したもので、大きな居住面積が確保されているわけではない。このような点から見て、当遺跡は通常の集落と違った性格をもつと推定できる。

平野から奥まった山間地に立地する古代から中世の遺跡が、近年加賀、能登、越前地方でかなり発見されている。いずれも山腹斜面を削り出し、谷を埋めて平坦面を造成しており、一般の集落とは考えにくいものである。そのうち比較的大規模なものは中世後期の城郭や真宗道場などが多いようであるが、比較的小規模なものの中には古代に遡る山岳宗教関連の遺跡が含まれている。以下の遺跡のうち引用文献の記載のないものは、1993年の石川県埋蔵文化財センターの資料集に拠っている。石川県小松市の里川E遺跡、浄水寺遺跡、羽咋市の宿向山遺跡[石川県埋蔵文化財センター 1987]、福井県南条郡のマンガラ寺遺跡などがその主要なものである。また富山県福光町の医王山周辺にも数多くの平坦面が山間部で発見されており、中には古代に遡る宗教関係遺構も含まれていることが知られるようになった。金沢市内においても、観法寺町の観法寺遺跡、夕日寺町の夕日寺B遺跡[石川県埋蔵文化財センター 1984,1991]、釣部町の釣部A遺跡[松山・小坂 1991]などをはじめとする類似の性格を有する遺跡が発見されている。これらの諸遺跡のなかには寺院関連の遺構・遺物が検出されたもの、また寺院関連の地名が伝承されているものが少なくない。当遺跡に関しても、地元田上の老人の話では、調査した平坦面のある場所付近は昔から「イッチョウジ(一丁寺?)」と呼ばれていたとのことである。平安時代から伝承が伝わることになるので、千年もの長い年代の伝承なのかという疑問の余地もあるが、念頭におく必要もある。

遺跡は田上の裏山の中にある。現在の田上は浅野川中流域右岸の河岸段丘上にあるが、古代には左岸および下流域まで含んでいた可能性がある。現在の田上は浅野川沿いの田上町、田上本町と昭和時代に山際を開発した田上新町に分かれるが、遺跡は田上新町のすぐ裏にあたる。近世・近代には田上本町は上田上、田上町は下田上と呼ばれていた古い集落である。『和名抄』にみえる田上郷は加賀国加賀郡八郷の1つであり、『和名抄』『延喜式』にみえる田上駅の所在地である。平安時代の田上の位置は、現在2か所が推定されている。その位置によっては、発掘した遺跡の性格に違いが生じる。

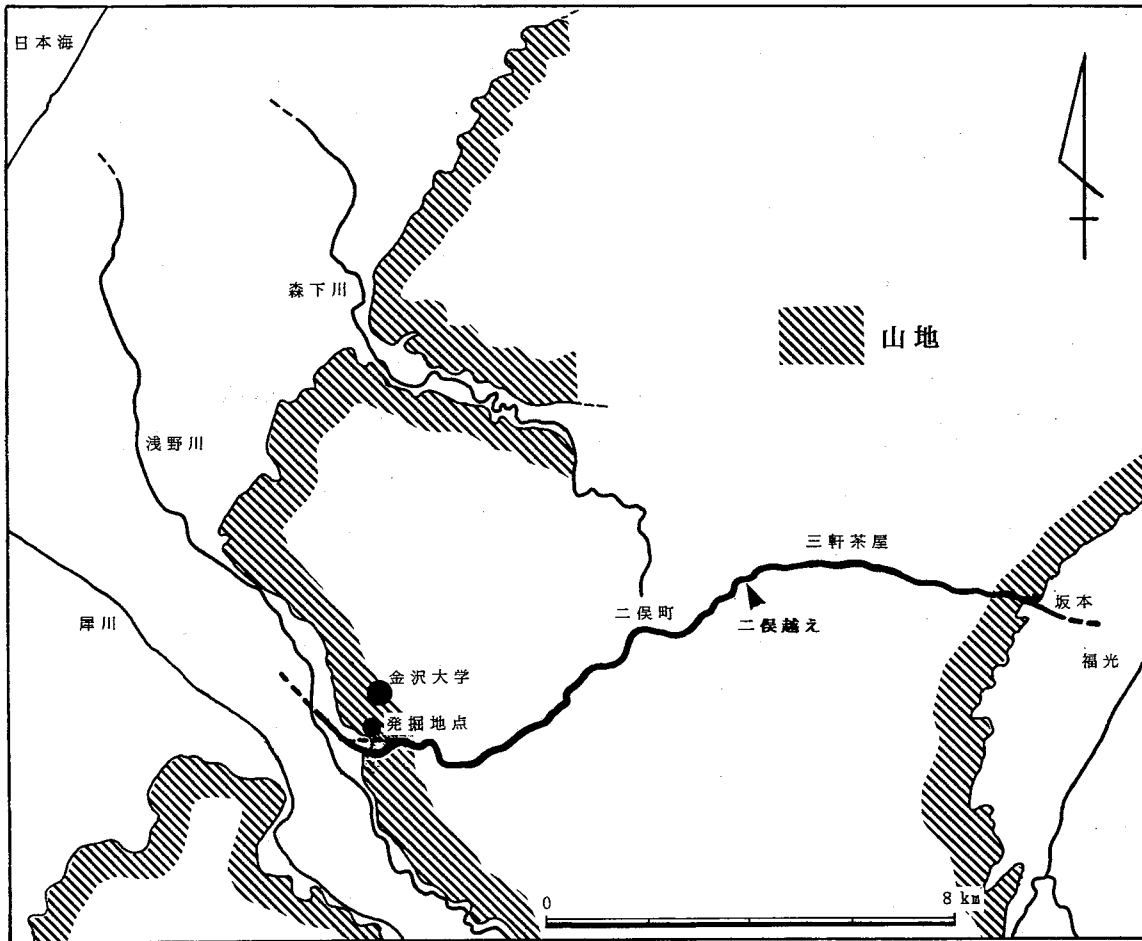


図18 発掘地点と二俣越え（朴坂越え）

金沢付近の北陸道は田上駅を通るが、北陸道の位置によって田上の位置が推定でき、田上の位置によって北陸道の位置が推定できるという相互依存の関係にある。平安時代の北陸道の位置については2説がある。

①田上駅から深見駅(現在の津幡町太田付近)へ出て、俱利伽羅を越えて富山県小矢部市坂本へ抜ける。この場合は現在の田上は北陸道のある平野部から離れるため、金沢市内の平野部に田上駅を推定することになる。発掘した遺跡は田上駅から遠い。田上駅が現在の田上付近よりも平野部にあるという推定は『加能郷土語彙』で昭和17年に述べられた説である。『大日本地名辞書』は金沢市尾山、『上代歴史地理新考』は浅野川北岸に田上をあてている。

②田上駅が現在の田上である場合は、越中への本路と能登への支路の分岐点になる。北陸道本路は現在の田上から大学の裏手にあたる二俣を通り朴坂を越えて富山県福光町坂本の坂本駅へ抜けたことになる(図18)。遺跡の所在する場所はこの推定駅路に沿うことになる。田上駅が現在の田上付近に

あるという推定は『加賀志徴』で昭和12年に述べられた説である。『三州地理志稿』も同じ考えを述べている。

森田梯教授のご教示によると、現在の田上付近に古寺があったことを示す史料はない。また、②二俣越え説を採る人よりも①俱利伽羅越え説を採る人が多く、森田教授の考えも金沢市横枕付近にあったと推定している田上駅から深見駅へ出て、俱利伽羅を越えて小矢部市坂又へ抜けるというものである〔森田 1992〕。しかし、二俣越えが官道でないにしても、越中へ抜ける古道であった可能性はあるという。

こうしたことを考えると、発見された遺跡が官道ではないにしても古道に沿う可能性が否定できず、たんなる人里離れた山間部の孤立した遺跡と片づけるわけにもいかない。出土した遺物は小さな土器碗の破片ばかりで、日常生活用の甕などの破片は非常に僅かであった。遺構も宗教関係であることを明確に示すものは発見されなかったが、遺跡の存在する地形から考えれば平安時代後半の宗教関連施設である可能性も否定できない。伝承では「医王山四十八か寺」という。今回発見された遺跡は古くから「イッチョウジ(一丁寺)」と呼ばれていることから、医王山四十八か寺の伝承に関連する遺跡の可能性もでてくる。本格的な発掘調査によって、こうした疑問点が解決されることを期待したい。

引用文献目録 (刊行年度順)

- 富田景周, 天保元年(1830)『三州地理志稿』(『大日本地誌大系41・三州地理志稿』1977, 雄山閣, 83頁)
- 森田平次 1937『加賀志徴』石川県図書館協会, 404頁
- 日置謙 1942『加能郷土語彙』金沢文化協会, 508頁
- 吉田東伍 1971『大日本地名辞書 第5巻北国・東国』富山房, 111頁
- 小林健太郎 1978『古代日本の交通路Ⅱ』大明堂
- 石川県埋蔵文化財センター 1983『押水町宿向山遺跡・第1次発掘調査概報』
- 岡本晃 1984『夕日寺B遺跡出土遺物』『石川考古』156
- 井上通泰 1986『上代歴史地理新考1・2』秀英書房
- 石川県埋蔵文化財センター 1986『第2節 9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷』『漆町遺跡Ⅰ』187-202頁
- 石川県埋蔵文化財センター 1987『宿向山遺跡』
- 金沢大学総合移転実施特別委員会・遺跡調査委員会, 1989『第2章 角間地域の地形・地質概要, 第1節 地形(藤則雄)』『角間』3-4頁
- 山下知・松山和彦 1991『金沢市夕日寺B遺跡(フウヤキ)の再評価』『石川考古』207
- 松山和彦・小坂大 1991『金沢市釣部町の古代遺跡について』『石川考古』209
- 森田梯 1992『古代加賀国の駅制』『金沢大学日本海域研究所報告』24
- 富山県福光町医王山文化調査委員会 1993『医王山文化調査報告書 医王は語る』